



謙澄の父房澄(号・臥雲)は、文政2年(1819)10月に生まれた。若くして庄屋、大庄屋をつとめて治水事業、新田開発、会計事務の刷新などの功績をあげた有能な指導者である。余暇には和歌をたしなむ風流人だった。近くに住む村上佛山と親しく交際していた。男のこどもたちは、みんな水哉園に学んでいる。

「青雲の志をいだいて上京」

四男の謙澄も佛山の水哉園に慶応元年(1865)8月、10歳になったばかりの時に入門した。ところが、慶応2年8月、小倉藩では長州戦争の混乱から百姓一揆が起り、多くの庄屋、大庄屋、商家が焼失した。末松家も家財を焼失した。一家は香春の親戚の家に身を寄せていたが、あわれんだ佛山は幼い謙澄を水哉園に預かり、共に生

活しながら学問を授けた。

謙澄は水哉園における五年余の勉学を終えて、明治4年(1871)に大望をいだいて上京。このころ、謙澄の学問はかなり進んでいた。のちに「亡師佛山先生を祭る文」で、回想して「自分の学術、文章が少しも他人に引けを取らないのは実に先生のお蔭である」と書いている。上京後、経済的に苦しいため、書生をしていたが、謙澄は偶然、知り合った高橋是清(のちの首相)に英語を学び、かわりに漢学を教えるという交換授業をはじめた。そのうち謙澄の英語の力も相当について高橋も驚き、小学校の教員になるのは惜しいという言葉にしたがい、合格していた師範学校を退学することとなる。

生活費を得るために2人は外国人教師フルベッキのところに来ていた米英の新聞を借り、それを翻訳して売り歩いた。幸運にも東京日日新聞に買ってもらうことに成功し、月に50円の収入を得た。

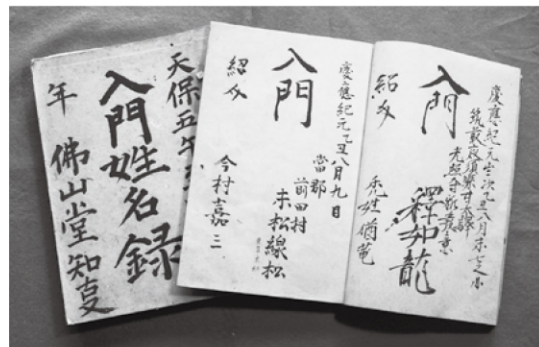
明治7年、謙澄の文才が認められ、正式に東京日日新聞社に採用。[笹波萍二]のペンネームで社説も執筆する。社長の福地源一郎にも才能と人柄

を愛され、年間50編以上の社説を書き、大いに筆名をあげた。日本の代表的記者21人の1人に数えられるようになる。

福地によって伊藤博文、山県有朋にも紹介されて、明治8年、官界に入り、正院御用掛となる。

その後、陸軍征討総督本営付として西南戦争に従軍し、実際には謙澄が書いたものだが、山県有朋の名で出した西郷隆盛宛ての勧告状が名文であったため、西郷軍で話題になったという。やがて、このような謙澄の活躍が認められ、英国留学につながっていくのである。

(文化人末松謙澄を考える会 城戸淳一)



末松謙澄(幼名線松)の名前が記された水哉園の入門帖